

千葉高校新聞

発行所
 県立千葉高等学校
 報道委員 会
 責任者 時田 秀久
 印刷所
 千葉日報社 出版印刷部

昭和41年11月28日

「後期新役員決まる」会長はH百屋くん

先に行なわれた後期生徒会長選挙で、2名の古屋信明君が信任投票によって、後期生徒会長に決定した。

古屋新会長は立ち合い演説会の時も、小雨の中で一生懸命、演説していたが、にもかかわらず、彼の信任票と不信任票との差はほんのわずかだった。

なぜ、かくも不信任が多かったか。それには色々意見もあるが、その中でも一番多いのは、彼の姿勢の事である。(この姿勢は僕達に対する態度の事)

みんな、彼は姿勢が高いといふ。生徒会長たるもの、学校第一の公僕でなければいけないといふ。三年生の不信任票の大部分はその辺の原因にあるとぞうだ。

姿勢が高いという事は為政者にとって、致命的な事ではないだろうか。為政者は頭を低くしなければならぬ。(独裁者は別です)では、そんな古屋君はどう考えているか。今から聞いてみよう。

文化祭が終わった。例年、例年といってもまだ一回だが、思う事は、千葉高の文化祭には人間のあたかみがない。少なくとも、私の見た限りでは人間のあたかみという物は、現在の様な物質文明の世の中では、ある程度、無視されてもよいのかもしれない。けれど、私には千葉高の文化祭が非常に冷たく思えた。

単なる、作品・研究物の展示、そして機械的な説明、これらの物を私が見、そして聞いた時に、私は悲しかった。子供のころ、野原を遊んだ思い出が頭に浮かんできた。その頃の人間と人間との交わりが今の自分達にはないように思えた。

こんな事を長々と書くと、キザな奴だと思われるかも知れない。けれども私は小さなころの

人と人とのつながりが、今一度よみがえってほしいと思う。いられはもつと人間的な人間になってほしいのである。十六七(私は十五だが)になった私達は既に現在の殻はつとした物質文明の中に放り出されてい

説論 寒い

千葉高の文化祭に代表されるような冷たい世間は(特に千葉高は冷たい。冷酷だ。)インテリらしく著述の特性であろうが。

けれど私はインテリの物質文明、いいかえれば冷たい文明よりも、痴れ者達の精神文明の中で書きたい。

世の中に逆行するようだが、私は、そうあることを願う。文化祭は、単に、作品展示、研究発表の場だけではないはずである。学校たつとぞうだ。ただ、朝学校へ来た、屋敷をとって、勉強だけして帰るなら、学校なんて有名無実のガイコツに過ぎない。

私の論をつまらぬ感傷にすぎんと笑われる方もあるだろう。笑いたければ笑ひ給え。あなたが私を笑うようになった時あなたはもう一度、自分を言語してもらいたい。単なるマシーンに、それも能率の悪いマシーンになってはいないか。本当の人間はマシーンではない。心のあつもの。それが人間だ。特に、冷酷だと評されている千葉高生諸君。いや、「あなた」だけでも人間になるのではないか。

心を持った人間に。
 (21 時田秀久)